

授業内外多読の実践 多読を促進する教員の役割とは

小林めぐみ

1. 多読授業の課題背景

平易な英文を大量に読み親しむことで英語力を高める多読（Extensive Reading）が大学の現場で実施されるようになって久しい。初期の導入時期には、多読の実施法と効果に対する疑義や多読図書の確保といった問題が多々指摘されたが、昨今は多読の意義については一定の理解が進み、またオンライン多読システムの普及によって、比較的安価に「いつでも・どこでも」多読図書にアクセスすることが可能になった。しかし、学習環境が整った今も「いかに多読を促進できるか」は依然として課題である。これまで授業内多読の推奨、読書意欲を刺激するアクティビティの導入、読書目標の管理など様々な試みがなされてきたが、本稿もこのような探究の一環として、授業外の多読を促す仕組みの検討結果を報告したい。

2. 授業外の多読促進の課題

筆者は 20 年以上にわたり多読専用授業を担当してきた。近年はオンライン多読システム Xreading を主に利用し、100 分授業のうち 45~60 分の読書時間を確保しつつ（学期 14 回の授業中約 10 回）、授業内で多読関連アクティビティ（本の紹介など）や個別面談を取り入れている。2022~2025 年度のアンケート結果(表 1)では、95%が「多読の趣旨は理解」し、92%が「英語力向上に効果があった」としており、別途授業アクティビティについて尋ねた結果でも、個別面談は 98%、本の紹介は 94%が「ためになった」と高い満足度が示された。一方で、「熱心に多読に取り組んだ」とする受講者は 54%にとどまる。実際の読書量も目標とする 10 万語に比べ、平均語数は 6 万語弱で、中央値は目標の半分にも満たない(表 2)。多読時間の記録からも授業内の多読時間（実質約 6 時間）以外の取り組みは非常に限定的であることが見て取れた。つまり、多読授業の内容は肯定的に捉えられているものの、それが授業外の多読にはつながっていないのである。

表 1: 多読受講者の学期末アンケートの結果 (2022-2025 年度)

	<i>n</i>	<i>mean</i>	<i>SD</i>	1	2	3	4	5
多読の趣旨は理解できた	85	4.44	0.865	4%	1%	0%	39%	56%
多読による英語学習に興味を持てた	85	4.26	0.804	4%	0%	1%	58%	38%
英語力向上に効果があった	85	4.22	0.836	4%	0%	5%	54%	38%
熱心に多読に取り組んだ	85	3.56	0.957	2%	9%	34%	38%	16%
多読をこれからも続けたい	85	3.96	0.731	2%	0%	14%	66%	18%

(1: 全くそう思わない、2: そう思わない、3: どちらでもない、4: そう思う、5: 強くそう思う)

表 2: 多読受講者の 1 学期間の読書量と読書時間 (2022-2025 年度)

	受講者数	読語数(平均)	読語数(中央値)	多読時間(平均)	多読時間(中央値)
2025	27	56,156	44,142	7.4	5.0
2024	17	57,184	39,778	7.0	5.0
2023	27	65,025	56,299	9.1	8.0
2022	27	53,438	54,855	8.5	8.0
総合	98	61,472	46,806	8.1	7.0

3. 授業内外をつなぐ「橋渡し設計」

このような問題意識のもと、改善案を探るべく、多読指導歴 20 年以上で、受講者の多読促進に成果を挙げている熟練指導者 5 名へのアンケートとインタビュー(約 60 分)を実施した。この過程で、様々な取り組みが共有されたが、授業外多読の促進には、細部に注意を向けた工夫が必要であることが浮かびあがってきた。以下に特定された三つの工夫は、授業外でも学習者が多読に取り組む動機となる「橋渡し設計」と位置付けられる。

(1) 目標設定の明確化と継続的な振り返り

一つ目の工夫は、目標設定の明確化・細分化と、具体的な評価方法・基準を定めた継続的な振り返りである。筆者は、毎回の授業で各学習者とやりとりする振り返りシートを作成し、1 週間の小目標(約 1 万語)を明示するとともに、それを達成するための行動計画（例：火曜日の空きコマに多読をする、通学時間に読む、など）を学習者自身に立てさせ、週ごとに短い振り返りのコメントを記入させてきた。しかし、振り返りの基準が曖昧であっ

たため、読書量に関する十分な内省を促すには至っていなかった。これに対して、ある熟練指導者は、授業の冒頭に授業外多読の進捗を振り返る時間を設け、1週間の目標(例：1万語以上、55分以上)に対する達成度を4段階のスコアで記入するという明確な基準を設定して自己評価させていた。振り返りシートは成績評価の参考資料としても活用されており、この方式を導入以降、授業外多読が大きく促進されたという。

また、別の指導者は、読書量の成績評価を、単に総読語数や総時間ではなく、授業内多読時間、授業外多読時間、多読実施日数など複数の項目に細分化していた。このような評価方法は、「授業外でも読むこと」や「継続的に多くの日数にわたって読むこと」が望ましいというメッセージを学習者に示す役割を果たしていた。このように細部まで配慮した振り返りや評価の設計が、授業外多読の促進に寄与していたと考えられる。

(2) 成果の見える化と見守り

二つ目の工夫は、成果の見える化である (cf. Van Amelsvoort, 2017)。前節で述べた目標設定と振り返りも成果の見える化に直結するが、熟練指導者の一人は、各受講者の読書量や読書パターンをグラフ化して、視覚的にわかりやすいフィードバックを行っていた。このような個別のフィードバックは教員にとって負担が大きいものの、学習者が自らの読書の進捗や読書習慣を客観的に把握できるようにすることは、多読への意識を高めるうえで大きな意義がある。教師は監視役ではなく、学習者の多読の過程を見守り、支援する伴走者の役割を担っている。きめ細やかなフィードバックと見守りは、教師と学習者の信頼関係を築き、授業外の多読を促進する一助になると考えられる。

(3) 標準プランの提示

三つ目の工夫は、読書リストの提示である。多読では、数ある多読図書の中から自分の興味に応じて自由に本を選んで読めるという利点がある一方、選択肢が多すぎるために「何を読めばよいかわからない」という状況に陥りやすい。そのため指導者には多読図書の案内役という役割も求められる。ある指導者は、単発的な案内ではなく、より包括的な読書リストをオプションとして提示していた。このような「標準プラン」の提示は、図書選定の負担を軽減し、語数やレベルも含めて読書の見通しを与え、安心して多読に取り組める環境作りにつながる。高瀬(2010)でも Oxford Reading Tree シリーズのタイトルリストと語数をあらかじめ受講者に提示したところ、そのリストを読破しようとする動機づけにつながったことを報告している。このことから、標準プランの提示は、授業外多読への橋渡しとして有効な支援といえるだろう。

4. 多読を促進する教師の役割

ここで、改めて多読指導における教師の役割を整理したい。まず、多読を指導する者が多読の原則・趣旨や多読図書について十分な知識を有していることは大前提である。また、内発的動機が多読の成果を左右することから、読書の楽しみを体験できる活動を取り入れたり、自ら読書を楽しむロールモデルとして学習者を導いていく役割も軽視できない。実際、「英語で読むことが楽しい」と感じる体験こそが、多読を続ける最大の原動力になると考えられる(深谷, 2011)。一方で、授業内で多読時間を確保し、興味を喚起するアクティビティを実施したとしても、読書そのものの楽しさや、一人ひとりが夢中になれる本との出会いまでを教師が保証することは難しい。本研究でも示したように、それだけでは授業外の多読は十分に促進されていない現状がある。授業外でも学習者が読書を継続的に取り組めるようにするには、多読の理念に反するような強制や、学習者の意欲のみに依存するのではなく、読書行動を妨げる障害や不安を軽減する支援が肝要である。多読が十分にできていない学習者の多くは、その状況をよしとしているわけではない。読めていないこと自体がストレスとなり、その結果、さらに多読から遠ざかるという悪循環に陥っている可能性もある。したがって、本稿で示した三つの工夫に代表されるように、学習者が無理なく多読を継続できるような橋渡しの学習デザインを構築することも多読指導者の重要な役割といえよう。

なお、今回の熟練指導者とのインタビューによる対話は、授業改善の具体的な示唆を得るだけでなく、自らの指導を相対化し、細部への気づきや新たな視点を得る貴重な機会となった。改めて感謝の意を表するとともに、今後もこうした実践の成果と知見を共有することで、多読指導の向上に貢献していきたい。

5. 引用文献

深谷素子 (2011). 「読書指導の場としての多読授業: “Reading for pleasure” というマジックワードを再考する」『慶應義塾外国語教育研究』8, 69-90.

高瀬敦子 (2010). 『英語多読・多聴指導マニュアル』東京:大修館

Van Amelsvoort, M. (2017). Extensive Reading Onboarding: Program design for increasing engagement. *Juntendo Journal of Global Studies*, 2, 98-106.